

令和〇年(少)第〇〇号 強制わいせつ保護事件

抗 告 理 由 補 充 書 (1)

令和 年 月 日

福岡高等裁判所 御中

少 年 〇〇 〇 〇
付添人弁護士 福岡 九州男

上記少年についての頭書事件について、付添人として下記のとおり抗告理由を補充する。

記

第 1 はじめに

抗告の趣旨及び抗告の理由は、上記少年本人がすでに提出している抗告申立書のとおりであるが、少年本人の作成にかかるため、必ずしも趣旨や理由が整理されて作成されてはおらず、また内容が不十分なものであることから、抗告の趣旨及び理由を整理するとともに、抗告理由の内容を補充する。

第 2 抗告の趣旨

原決定には、処分の著しい不当があるので、その取消を求める。

第 3 抗告の理由

1 本件事案について

本件は、少年が、令和〇年〇月〇日、福岡市中央区内の路上において、通行中の女性を引き倒したうえ、被害女性が履いていたパンツ内に手を

差し入れて下半身を触ったという事案である。

2 処分の著しい不当

(1) 少年の要保護性評価の捉え誤り

原決定は、少年の要保護性について捉え誤っている。

原決定の要保護性評価の基礎となったと考えられる鑑別結果や調査票では、少年の性格について、神経質で自信に乏しく、自分を否定的に捉えがちでありながら、これを隠すように、自信過剰で独善的な態度をとっていると評価されており、精神的・社会的発達が未熟であって、心情が安定しにくく、抑制力に乏しいと評価されている。

そして、本件について、その独善的な考え方から、自己を馬鹿にするような女性には性的な攻撃を加えても構わないという身勝手な考えから起こしたものであると判断し、少年が歪んだ対人認識や異性観を持っていると指摘されている。

この点、たしかに少年は、幼いころから対人トラブルが多く、母親自身もその問題を認識しており、そのことが本件事件の背景になっている可能性は高い。

しかし、少年は対人関係のとり方の問題を抱えている（発達障害、あるいはそれに類するものが考えられる）ものの、成長していくにしたがって、その対人認識・対人関係の中で少年なりに努力し、特に問題なく生活していける力をつけてきている。

また、異性観についても、法律記録中のメール内容を詳細に見ていけば、少年が異性の友人や知人との間で、いかにも思春期にある男子という内容のコミュニケーションをとっており、そこに少年自身の異性観のゆがみや問題点を見出すことはできない。

むしろ、本件事件の原因としては、学校を変わって勉強や仕事、スポーツなどで特にのめり込むものを持たず、エネルギーを持て余していた少年が、思春期の少年に存する性的衝動を抑えかね、そこに少年自身がもともと持っている対人関係・対人認識の歪みが影響して、かかる事件に至ってしまったと考えるべきである。

(2) かかる要保護性から導かれる相当な処分内容

このように要保護性を考えれば、少年を少年院という外部とは全く異なる社会に隔離し、ここまで少年なりに培ってきた対人関係の技術

を損なわしめるべきではなく、むしろXで働く中で、少年自身のエネルギーを仕事に向けさせるとともに、職場の中の対人関係の中で、さらに少年自身の精神的・社会的発達を促していくことが望ましいことは明らかである。

3 結語

以上のとおりであって、少年に望ましいのは保護観察処分なのであって、第2種少年院送致という原決定の処分は著しく不当と言わざるを得ない。

以 上